

は一月中旬迄の輸出五千六百二十五萬七千圓は、盛況空前の昨年と同様に比するも九割五分の増加にして、輸入四千九十二萬圓は三割八分余の増加を來し、輸出超過一千五百三十三萬七千圓は昨年一月の總出超額に比しても十五割八分六厘の増加を示す、物價の狀勢破天荒なるを見る可し、歐洲は暫く措くも、印度の人口三億余、支那四億萬、南洋方面九千萬、北米一億四千萬、南米五千五百萬人、合計九億八千五百萬人、世界總人口の約六割余は我貿易界の好顧客として將來益々有望なるものである。

舊臘獨逸一度講和を提唱して、我經濟界は暴風に襲はれ、成金連の恐慌一方で無かつたが、戦局は爾く容易に收まるものでなく、假令今後一兩年にて戦亂終熄するとも、歐洲交戦の産業迄に回復して、我貿易を驅逐し、我新販路を奪還す可しとするは、余りに早計である。戰場に立てる壯丁一千五百萬人、財帛を糜する日に二億四千萬圓、昨年末迄に既に千二百萬圓を費したのである。

戦局前後四年に亘るとすれば三千四百億圓に上らんと云ふ。殺傷の數は、昨年八月迄、二箇年間の累計二千萬人を超えて、列國皆壯丁に窮し、更に徵兵令を改めて、例へば獨逸の如きは十七歳以上六十歳迄の男子全部を徵募するに至つた。我國の壯丁に見るも、二十一歳以上四十歳迄の男子は、八百萬に過ぎず、十六歳以上六十歳を數ふるも、千五百萬人に過ぎないのである。更に其後の戦線廣さを加へ、大戦米國を経れば、其損害の増加する事夥しきは想像に難からず、従つてその生産力の減衰甚だしきに至るべく、之を回復するには、少くとも今後十年以上二三十年を要すべし、戦禍を被れる公私の經濟を恢復するには、物資の需要容易に減せざるべく、資本の豊富は先進産業國の長所であつたが、今や其缺乏に困難を加ふ可く、債金増加し、金利騰貴し、輸入税の賦課となり、引上となり、物價は低落の機會なく、貿易の逆調は回轉し難かるべし、戦前三ヶ所に過ぎなかつた英國の造兵廠も、其後四千六百箇所となり、生産工場概ね

軍需品製造場となるに見ても、各國共に之を復歸するには、多少の年月を要せん、假令戦時中尙戦後の經濟戰に對する經營準備に汲々とし、既に英佛共に多少貿易恢復の傾向が有るけれども、此等諸原因の存する間、之に應じて我貿易も好況を持續す可く、我當業者が此盛況を一時のものとして投機的に扱はず、戦後も先進國と角逐して、既に占め得た地歩を維持すべき覺悟を以て、奮勵努力すれば、我産業貿易は現在大に發展するのみならず、遠く將來に至つても、隆盛ならしむ事が出来る、否隆盛ならしめずんば、我國は立ち行かないのである。

二 粗製濫造の弊

我國の余り落伍せるを憐みて、天祐常に我を惠み、圖らざる興國の氣運到來せるに際して、根本から之を阻碍するは、海外各地より響き來る我商品の不評

判である、我商人に對する非難の聲である、我遣外官、領事、在外商人、新歸朝者並に親切なる外人の報告皆一轍に出で之を痛嘆せざる者なし、其弊因の幾分は、後進國の常例なる産業組合の幼稚にして、小規模なるに在つて、家内工場が製品の不統一となるは勿論なるが上に、貧弱なる資本と仲介商との壓迫に、生産の粗惡に陥るを顧みるに遑なきは止むを得ざる所にして、之を救済するには、産業組織の發達を促進するを要し、其間應急の既設としては、同業組合の効果を十分に發揮せしむると同時に、検査制の擴張履行亦甚だ必要なるは、世の認めて實行を望む所であるが、或は海外の事情に迂濶にして需用の性質を審にせず、好尙の風潮を察せず、各地の商習慣に通せず、或は急進未熟の技術に依るの不始末又は惡辣なる外商に累せらるゝが如きは、夫々救済の道困難ならざれども、我粗造濫造の性質は、弊因更に根幹に存して、深く人心に侵染せるものありて、之を抜く容易ならず、之を抜かざれば興隆の氣運も我を見棄て、

去らんとするのである。

吾人の日常の經驗に依ると、内地に於てすら、曾ては英國品に比して粗惡に感ぜざる獨逸品も、其輸入杜絶に乗じて之に代れる我製品に比すれば、甚だ優良なるを感ぜざるを得ず、吾人の寡聞を以てするも、我商工の不正不義なる、言語に絶するものありて、粗製濫造と云ふよりは寧ろ偽製贗造と稱するの適當たる事實、頻々として耳目に觸る、例せば鈕釦を糊付にせるシャツ、其片袖なきもの古新聞紙を入れたる長靴、裏か表か判別されざる皿、コップの員數を揃ふるに茶碗を以てせる、繪付が間に合はずして白生地の商品を混入せる、芯なき鉛筆、指の入らぬ手袋、發光せざる懐中電燈、發火せざる燐寸、多量の製粉を混じて餛飩玉と區別なき石鹼等、其他赤十字用の物品すら粗惡にして用ふべからざるものを送り、空隙ある鍋、藥罐を鉛にて充填し、瑛瑯にて隠し、使用すれば熔解漏水するあり、南部支那には用を爲さざる時計を名古屋時計と呼ぶ、

一箱の内五割乃至七割の不正品を混入して空前の盛況に乘じ、續々海外各地の缺點を充たさんとて輸出せらるゝに於て、印度の如き我好市場に於ても、歐洲品代用の日本品の粗惡に苦しみ、之を免るゝだけの爲めにも、平和の一日も早からん事を希望すと傳へらるゝのは毫も驚くに足らず。此の如き詐欺的心術を以て産業貿易に従事するに於ては、其爲さざる所なきは當然にして、惡評非難の翕然として海外四隣に響く、亦止を得ざる所である。斯くして興國の大機は却て百世の危機を生み、我商工の陋劣を遍く世界に廣告するに終り、斯ばかりの空前盛況に際會せずば、斯くばかりの醜態を暴露せまじきを恨ましめ、一度失墜した信用は數十年を経るも回復するに難く、一度通用せられたる好機は百世を経るも容易に再來せずして、隆替忽ち地を換へんとするのである。

さらでだに斯る不正不義の所業は、國家の體面を汚損しし、害毒を各方面に及ぼすの程度に於て、刑法上の重罪犯よりも深大なるものに拘らず、世人一般

に、商工の徒に對しては、之を寛假するの傾向あり、此れ前代の遺習に囚はれて、人心未だ時代の變遷に應じて進化せざるが爲にして、時代後れ、時代錯誤の陋弊である、英國の如きはチュートロ王朝時代に始めて商工の階級が勢力を得て以來四百年、其の如何に早くから近代的社會生活に訓練陶冶せられつゝありしかを見るべく、少くとも徳川執政の二百年だけ遅れたるのみならず、商工關係に於て寧ろ進化して居る後進國を以てして、俄かに世界に衡を争はんとする、舊弊の去り難きは諒す可きも、振はざる産業を益々振はざらしめ、貧しき我國を益々貧からしむる事を知つたならば、快力一揮、弊習を裁斷し、一時も早く前代の窠窟より脱却するの覺悟が無くては適はず。

三 商業道德の發達せざる原因

我國の道德程度は、他の一等國に比して左したる高低の差なきに似たるに、獨り商業道德に至つては、二三等國の人民に比するも尙遜色あつて、支那人にすら劣るの事實乏しからず。他の點に於ては世界の一等國と覇を争ふ邦人が此の如きは特に注目反省に値す、其國際に通商するの日淺く、商工國としての訓練全く缺乏し、之に適應する社會生活の陶冶未熟なるに因る事は、先進諸國の實例に見る首肯す可きか、其れより大に經驗し、訓練を有すべき時に際して、恰も徳川氏の時代となり、生憎其治安策は鎖國令となつては外國との交通を絶ち刺戟を去つて、國中に中世的社會組織の其儘結晶持續するを助長したのである、是れ特に甚だしく商工の發達を阻碍して、大影響を今日に遺せる原因である、蓋し社會進化の道理に於て、他に特別の事情なければ社會は先に農事國となつて、商工はまだ社會存立の要素たる能はずして冷遇されるを常態とす。商工は其業務上最も道德を要するのに、最も不正不義に流れ易く、其向上發展は後代の進化に俟つこと恰も立憲政治が、人民の智徳進化せる後に非ざれば、發

違せざるに異らないのである、徳川氏は其時代に處して「現在の等級階級を未
來まで今の關係の如く永く之を維持せんことに努め、凡て新なる習慣、風俗及
び欲望の發生を抑制し、質素を最高の徳性とし、向上の思想改進の事業をも或
は排斥し、國民階級相互の關係に就き一意動搖を防止することに力を致したの
である」(吉田博士倒叙日本史)其社會的狀勢に承順して、學農界商政策を執れ
る亦止むを得なかつたのである。久亂の後を承けて、天下皆治安を熱望して惜
かざる時に、全國を統一した徳川氏は、時代の要求を満足せしめ、民心を狀攪
するが爲にも、亦一門の安寧永續の爲にも、治安の爲めには萬事を犠牲に供す
る必要ありしに似ておる、當時世を擧て如何に治安を熱望したかは、全國の神
社佛閣皆天下泰平家内安全の文字を見ざるなきに徴しても、其一斑を窺知する
を得るのである。されば朝鮮征伐明國併呑に協戮した徳川氏も、大船の建造を
禁ずるに至り、外國との通商も、外國の宣傳も禁ずるに至り、苟くも治安を維

持するが爲めには、國家の利害も、人民の損得も總て顧慮するの違なく、國內
に蟄居して自然に開展せる士農工商の叙次を明確にして固定せしめ、家綱に至
つては町人の帶刀を禁じ、綱吉に至つては庶人には短刀一口の外を禁じ、次第
に區劃を嚴にし、源平以前には別に武門武士と云ふものはなく、農工商皆事あ
れば兵を執て起ち、降て元龜天正に至るも、秀吉、清正が身を農家に起し、小
西行長の商人より出でしが如きは、復た見る事が出来なくなり、士人には人間
としての智識道德を研磨せしめ、十分の教育を與へたるも、農工商は成るべく
教育を與へずして、無學文盲ならしむる道を執り、古來治安維持の最大方便と
せられたる黔首を愚にするの政策を、時代の趨向に適應して最も功妙に、實施
したり、智徳ある階級則士人には總て扶持を與へて平飼の人物と爲し、以て
獨立獨行する能はざらしめ、従つて柔順ならしめ、治安を害す可き言行の如き
は之を夢想だもする能はざらしめ、自力にて生活する農工商には、智徳を責め

ず、教育を興へず、素町人士百姓なればとて大抵の失態は、治安に害なき限り之れを寛假すると同時に、斬捨御免の範圍内に置きて、禽獸同様に柔順になさしめたのみならず、農は其職業の性質上四方に往來せず、多く人と交はらず、避間の地に籠居して、終生同一事を繰返すのみなるが故に自ら痴鈍因循に流れ易く、治安維持の爲めには此種族程都合好きはなく、故に之を士の次に置き、百方之を愛護奨励して、柔順なる納租動物を造り、商は其性質上、廣く交通し人に接する多く従つて新を擴め異を稱へ遠近氣脈を通する具ともなり、人心動搖の素をなし、自己亦見聞を廣め、伶俐に赴き易く是非善惡の辨別生じ、自然に惡政は此れを非議し治安を亂し易きが故に、之れを四民の最下級に置いて、百方之を墮落せしむる方針を執つたのである。さうでだに經濟組織の幼稚なる道德のまだ商工に普及し難き中世的社會に在りては屏息して日蔭者たる外なき商工は、斯る時代を固定して永續せられ、人外的待遇の下に蠢動した二百年、

墮落せざらんとするも豈に得べけんや。商業道德の今尙ほ地を拂つて空しき、偶然でないのである。

四 紳士と商人

前代に由來せる陋弊に埋頭して、世には士道と商業とを兩立す可らざるものと確信する者多けれども、是れ全く時代錯誤の見にして商業を詐僞の一種と心得、度量衡の目を盜むを必要な任務と心得、公然此れを懷習するは中世的社會の遺業なり、士魂は人類魂で武士道は人間道である。商業も人外の域を出で、斬捨御免の範圍を脱して、人として人を相手とする以上、士道を離れて成立し發展し繁昌すべからず。されば三四百年の訓練を経來りて世界第一の商業國たる英の商人は能く縉士道を守り、之を守るもの商人に最も多く、商人のみの集合體とも云ふべき倫敦市會の品位は各種の職業者から成れる英國下院に優るこ

と遠し。一語に因て千萬金を授受することを、する商人は、其信義固くなかつたなら、取引成立せず多年の經驗に依つて訓練せられたる英商は、算盤の上より紳士道の必要を體得して、信義を重んずる特に強く、従つて他邦人皆英と取引するを好む。瑞西は時計の名産地ながら、英京ベンファン會社の極印あれば一割高く賣行くのである。英商は注文よりも寸尺分量多くし見本よりも上等品を送る傾向であつて、我商人は之に反す、算盤片手に仁俠を説くと冷評せられる英人、豈不利なるを知つて紳士道を守らん哉、英の紳士道は、日本の武士道と最も相近似し、共に是れ人類道の異名に過ぎない。士農工商皆人類である以上之に依らなければならぬが、最も廣きに亘り最も多く人に接するを要する商人は最も之を守るの必要があるのである。我國に於ても盛大なる産業を營む者は皆士道を守るのである。徳川時代の人外的取扱に沈淪して二百余年なりしも、我老舗名商は依然として人間道を把持し、敢て或は之を毀損するを怖れ、信用

を損じ店の暖簾にかゝはる所等は眞禁物である、三井、三菱、鴻池、住友、澁澤等の祖先若くは本人は皆武門に出で、武士的教養を経た者である、大會社の經營者は概ね士族出身でなければ則ち士的教養を受けた者である。世界を相手の槍舞臺に立つて、尙日蔭物であつた時代の町人的頭腦を以て心得顔に士道を無視して瞞着を能事とするのは、日中の幽靈にも似て醜態痴狀見るに堪へず、苟も人類の事業であつて向上發展し様とすれば、何物か人間道に依らざるを得ん哉、見よ歐米諸國に對照して我國の最も見る可きは、兎に角陸海軍に非ずや而して軍事こそ遠き昔から最も士道の訓練を経たるものである、司法、行政、教育も亦多く歐米に譲る所なきか是亦士的教養を受けた者の領分に屬し、醫業も亦稍誇るに足るものあるは、徳川時代より其帶刀を許され、士分に遇せられ、今日其局に當るもの、亦皆士的教養を受けるが爲に非ずや、獨り歐洲諸國に對して最も劣り、二等國の列にも入る能はざるものは産業である。和蘭の人口六

百萬に過ぎざるも、其貿易額、千九百十三年に於て、五十六億三千萬圓、其富力は百億圓に上る。瑞西の人口三百八十萬、其貿易額十二億七千萬圓、富力八十億圓、白耳義の人口七百五十萬人、其貿易額三十四億圓、富力百八十億圓、此點に比すれば、我日本の人口五千萬は、和蘭に八九倍し、瑞西に十三倍し、白耳義に六七倍しながら、其貿易額に於ては、昨年を除けば、是迄の最高記録たる四年の十三億六千萬圓も、是迄毎年之に劣りたる瑞西に對し、七分の多きのみ、和蘭の二割四分余、白耳義の四割に當るに過ぎず、富力亦三百億圓を數ふるのみ、其萎靡不振なる驚くべく、他の列強とは之を對照する勇氣だになからしむか、米の國官三千二百億圓、昨年度の輸出超過額無慮四十三億圓、昨年八月の現在正貨五十一億圓なるを知らば、三四億の出超に狂喜し、七八億の正貨を持余す我國は、如何にして彼等と對峙して行かんとするか。他の點に於て左まで劣るなくして、産業に於て此の如くに劣り、他の道德に於て劣るなくし

て、商業道德に於て特に劣り、士道の在る處敢て劣らず、士道の缺けたる處大に劣るを理解せば、算盤も亦士道に依らずんば立たざるを悟るべし。否算盤とは最も士道を要するに、却て之を缺乏するが爲めに、此特別無類の劣敗を來すものと知るべし。

五 實業家の陶冶

中世的社會は人文の發達と共に變遷し、農を本とし、士を尙べる專制式武斷の世は一變して、今や商工の時代は來り、次第に勢力を加へつゝあるのである。嘗ては人外に置かれた商工の次第に優遇せらるゝは、只近代國家は特に富力を要し之を産業貿易に俟つ故なり。豈其我慾敗値を尊んで之を重んせんや。今や商工は社會存立の要素となり得て、國家の重要階級たらんとす、何事も遅れたる我國に於ける時勢の急變は、其資格未だならざるに其地位獨り向上し、責任

之に伴はない、奇怪事を來し、人的待遇を受けながら、尙ほ前代の遺習に埋頭し、依然として人外的の所業に出で、憚らず、世人亦其地位の激變し其結果の重大なるを顧みるを知らずして、深く之を咎めざる傾向あるは、由々しき大事である。健全なる社會は其地位の重要なるに従ひ、之を責むる事益々嚴重なるを常とす、故に孰れの國に於ても、人間道たる武士道、紳士道の類は、社會の中堅上流に殊に勵行せらる、人間的待遇を與へずして蔑視したる時代には、其敗値も左した影響はなく、之を咎むるは人間並に扱ふ所以なれば、之を度外視去るは當然の風習なれど、既に社會存立の要素となり、相當の地位を占むるに當つても、尙人外的の所業を自他共に許すは衰頹の社會に獨り見るべき所である。産業貿易の利益の爲めに暫く之を思ふとせば、全く顛倒の見にして其愚は及ぶべからず、社會は爲に大害を被むる可きのみならず、我産業貿易は商工の道德卑低なる爲に振はず、之を根本的に興隆せしむるには、商工を士道に陶冶

するの外なく、之を責むる嚴に之を改むる深かくなければ如何して貧弱なる我富力を増殖せん、明確なる論證も僻習に味まされて理解なく、英商は特別の天稟よりして紳士道に依りて幸に利殖するを得るも、我は我が特別の因襲を奉じて更に大に利殖するを得べしと爲す者あれば、是れ其因襲を改むるの難く士道を踏むの厭さに一條の進路を見付けんと欲する者のみ、今こそ模範的として世界に嘆美せらる、英商も、第十七世紀の時代には、和蘭商人の正直に及ばざる遠く、其粗製濫造を非難せられたるが、十六世紀には西班牙、葡萄牙の後を追ひ、十七世紀には和蘭と争ひ、十八世紀には佛蘭西と並び、次第に訓練を積み陶冶を重ね、恰も其海軍が十六世紀末に西班牙の必勝艦隊を剿滅する以前にはドレーク一輩の海賊隊に過ぎずして、後日迄奈翁に海賊の國番頭の國と罵られたるものが、今や蔚然たる世界第一の海軍國となれるが如く、其商業に於ても前代の陋習を去り、時代後れの悪弊を除くに上下一致絶へず苦心努力の結果、

海賊と並べて擯斥されたる商人も、次第に向上して今日の地位に達せるが、近年尙商業道徳を絶叫し、不正なる富者の排斥を力説し、敗値防止法案の議會に提出せらるゝ等間斷なき奮勵努力を示したのである。我國に於て商業道徳なる語の始めて唱へられたる以來未だ三十余年に過ぎず、實効未だ毫も擧がらずして、既に之を陳腐なりと嘲る傾向さへあるは、英人に對して顔色なかるべく、幾百年の訓練は利害に明かなる英民族をして、海賊より士道に悟入して大海軍國たらしめ、日蔭者人外的商質より士道に悟入して大商業國たらしめたり。士魂商才の外に成功の最大秘訣なきを見るべきである、夫は別我邦人の爲めに特別に商業の便法を與ふべしとも覺えず、政治上に於ては先進國が三百年を費せる進歩をば、我は二三十年に疾走せざる可からざる如き、産業界に於て突進跳躍を要するものあり、我國實業家をして軍人の軍事に於けると同様の精神を以て産業に従事せしめず、人間道に依りて立つと軍人の如く、且軍事に於ては常に

強膽明白を以て世界の狀況を知悉し、優る所長する者あれば之れを攻究體得するに一日も遅るべからざる如く、商戰亦然らざるべからざるものである。

獨逸の後進を以てして、英に比して粗製濫造と唄はれながら、着々弊を矯め長を採り、世界の各地に商權を擴張し、先進の英を凌駕せるを見よ、獨人軍事に長じて、同一の心掛を以て、更に商戰に於て其技倆を揮ふ、我國内に於てすら、我商品を驅逐して、之に代れるもの少なからず、浴衣地の如き、羽織紐の如き、巧に我風尙に投じて、我市場を蹂躪す、開戰以來も、英人は如何にして世界に於ける獨商の勢力を驅逐し、自國の商權を擴張す可きかを苦心し措かず其支那に於ける自己の長短を精査して自ら反省奮發するを見るに、

(イ)英人は坐して支那人の需要を俟つに反し、獨人は自ら其需要を喚起するに強め、此數年間に石油、洋燈、煙草、燐寸、砂糖、製粉、機械、縫針、電燈、電力の使用を教へ、又例へば製紙工場設立の計畫あれば直に繪畫幼

燈等を以て支那人に所要の機械器具等を説明會得せしむ。

(ロ)獨人は支那人の購買方を増加するが爲めには其土産の輸出を圖り英人の從來取引せる生絲、茶以外に落花生、大豆、胡麻のきを新に輸出するに至つた。

(ハ)最期支那は一般未開地に最も好餌たるを以て、獨人は能く無一物者にも融通して、事業を成功せしめ、而も回收に失敗せず。

(ニ)獨人は能く支那語を學び、平常支那人と交り、風俗好尚を詳にし、商機を捉る事を怠らず。

(ホ)獨人は反物を商戦の防禦第一線とし常に店員をして見本を携帯し内地を旅行し注文を取らしむ。

(ヘ)支那にて成功せる獨人は専門家に非ざるも事業上の才能に加ふるに熱心と氣力とを有し且自己の商賣に關して該博なる智識を有す。

獨人の長所に對して英人自ら努力せざる可かざる點としては、

(イ)銀行家との特殊聯絡を圖り、長期の貸付に應ぜざるべからず、

(ロ)領事館との連絡を計り、支那各地の需要語を知悉し商策を廻らさざる可らざること。

(ハ)支那語に熟達せざる可らず、語學に通ずるは其國に於て成功する旅行券である。

(ニ)國家の利益の爲には個人の利益を犠牲に供す可し、代理店を外國人に依頼するは商權失墜の第一歩なれば之を忌避すると同時に自國船舶との連絡を密接にし、到る處自國商を以て取引關係を保つを要す、千九百十四年八月の統計に依れば支那に於ける獨商は百十九人の英商を代理せり。

(ホ)店規に拘泥せず顧客の便宜を圖らざるべからざること。

(ヘ)英國が支那に於てモノポリーの英を貧りし時代は去れり、獨逸や日本は

盛に英商の勢力範圍を侵蝕しつゝあり、ランカンアの製品は決して日本品に劣るものに非ず、英人は大々の覺醒と奮勵を要す。(在香港總領事館關) 世界一流の商業國も日夜間斷なく奮勵努力して、如何に互に周到なる注意と研究とを拂ふかを知るのである。豈唯支那に於て然るのみならんや。獨逸工業者は賣行よき英佛白等の見本を研究調査すること熱心にして倦まず、顧客の嗜好や其勝手なる言分をも満足せしめんが爲に器械の變更を要すれば費用を顧みずして之を斷行し、迅速に新規の製品に着手すと云ふが如き、常に遙に注文取集人を派して代理店との關係を密切ならしめ、顧客に取入るゝに努めて、顧客の之を待つ親朋の如きに至ると云ふが如きは、其一端ながら獨商の盡力至らざるなき、恰も軍事に於けると一般なるを見るべきに非ずや。目前の小利に眩し、一時の奇利を僥倖し、常に人外的所業を得たりと爲す敗德者流の能くなる所に非ず。其努力奮勵に於ても我は其却下にも及ばないのは、其道德に於て劣るが

爲であつて、人間之を踏ますんば凡てに於て劣敗するは明かである。我幸に軍事に長するありて、其心掛を以て、其訓練に鑒みて、獨人の如く商戰に従事せば、謬りなきに庶幾からん乎。此氣風を養成し、現在の弊習を革除するが爲には官民朝野金力を集中し、全機關を督勵して活動しなければならぬ。

(イ)農商務省は産業組合、商業會議所等を督勵して粉製濫造を禁遏するが爲に全力を用ひなければならぬ。

近時商業會議所法及び重要物産同業組合法の改良を見次第に検査制の實現を見るは喜ぶべきも尙未しいのである。

(ロ)内務省は地方官を督勵し、左の事功の擧否を以て、其進退黜陟を行ふ標準の一と爲す可きである。

右の目的を青年團に注入すべき事。

井上東京府知事が商工の資金窮迫の粗製濫造に陥り易きを憂へ信用組合を

獎勵し實業家教育家を海外に派遣して商況に通せしめ、支那語講習會を設くる如き、此點に於て勗むるは奇特なりとする。

(ハ)文部省は特に中小學に於て商業道德の教育に重きを置く如し。

(ニ)司法省は商業道德破壊者をば罪に處す方針をとるべし。

因襲に道ひ商人なればとて寛するは興國の大業に翼替する所以に非ず。

(ホ)政黨は商業法の養成を以て其政綱の一となすべし。

國運の消息は懸つて此事績の擧否如何に在るの心ある、舉國一致の敬憤努力を要す。

實動を擧ぐるの左迄困難でないのは、商業を以て詐欺の一種と心得る商家の子弟も、兵營に在つては純然たる士道を勵行するの一事を見ても知るべく、服役中の商家子弟と店頭に座する者と一人にして兩様の精神となるは四圍の教導と因襲とに依つて然るのみである。

舉國一致の努力に依る事が英獨の如くにして實業家たるもの、時代の變遷を自營し、地位の向上を自覺し、責任の重大を自覺し、算盤も士道に依つて弾くの外結局不利なる事を自覺し、最も有利なる算盤は士道に存するを自覺するに至らば、近代國家の實質を具備し得て、先進列強の間に衡を争ふべきである。

内外の形勢と普通選舉

一 國民の聲

近頃、普通選舉を要求する國民的運動が各方面に於て盛んに起り、其勢恰かも澎湃たる怒濤の如き狀あるを見て、私は衷心より是を慶賀するものである。抑々普通選舉要求の聲が一部の人々に依つて提唱せられたのは昨今のことにあらず。現に私等も可成以前から、屢々熱心なる普通選舉論者の來訪をうけ、政

治家として一日も速かに普通選挙の實現を圖る様にと勸説せられた事がある、然しながら、私は當時未だ此の聲を以て國民的の要求を認める事は出来なかつた。故に私はそういふ勸説をうける毎に心竊かに此の要求が國民的絶叫となつて私の耳朵を打つ愉快な日の、一日も速かに來らんことを待ち望んだのである。然るに今やその愉快なる日が終に來た。苟くも眼ある者は必ず此の澎湃たる國民的運動の事實を事實として認めねばならぬ。苟くも耳ある者は必ず此の怒濤の如き國民的絶叫に耳を傾けねばならぬ。而も此間には尙ほ強いて眼を閉じて此の運動を見まいとし、強いて耳を覆ふて此の聲を聴くまいとして居る政治家があるのを見て、私は寧ろその心事を拜するに苦しむ。此の期に及んで、口を時機尙早に藉り、以て一時を塗糊せんとするは卑怯未練の態度である。時機は己に熟して居る。最早此の問題に對する政治家の答辯は曰く「賛成」か曰く「反對」かの簡單なる二語あれば足る。今日を時機尙早といふは猶ほ明治維新の時

機を尙早とし、憲法發布の時機を尙早とする如く、政治の勢を解せざる臆病論である。

梅花の綻ひるを見て、直ちに子等の春着を心配するのは親の愛情である。苟くも政治家たるものは、蕾を破る一輪の梅花に春の甍音を聴き、やがて歩み寄る櫻花爛漫の春に備へるだけの聰明と用意がなければならぬ。私は今日の普通選挙運動を以て、まだ必ずしも百花妍を競ふ盛春の域に達した國民運動であると認める者ではない。然しそれは確かに、普通選挙の要求がやがて必ず盛春の勢に達すべき事を豫報する梅花である。それも一輪や二輪ではない。梅花としては既に咲き揃て居る。今にして皆の近きを悟り得ない様な者は、假令吹雪の中に埋まるも、その春なる所以を解し得ないであらう。

蓋し、四季の順還するは自然の理想である。普通選挙の要求は時代の趨勢である。二者共に何物の力を以てしても、是を遮り止める事は出来ない。況んや

普通選挙要求の叫びは、單に國內に於て醗酵したる勢のみにあらずして、實に海外の大勢がその醗酵を助けて居るのであるから、此の海外の大勢が俄然として一變すると云ふ奇蹟の起らない限り、日本のみ獨り此の大勢に悄然たるかは到底可能ない。若し當局者が迅く此理に氣付いて、速かに是を實行する事猶ほ先帝陛下が早きに及んで憲法を發布せられ、舉國の民欣舞雀躍して、聖恩の鴻大なるに感泣した如くすれば、日本人は世界に向つてその憲法と普通選挙とを、共に平和と歡聲の裡に贏ち得た光榮を誇る事が出来るわけである。私は切にそうある事を希望する。世間には、選挙権は取るべきもので、與へらるべきものではないといふ議論もある様であるが、當局者が不明にして、當然與へうるべき國民の権利を與へまいとするからこそ、腕づくでも取ると云ふ殺風景な事にもなるのである。與へるとか、取るとか云ふのでなく、極く滑かに普通選挙を實現する事が出来れば、それが一番幸福であるに相違ないと私は確信する。

二 憲政の本義

私は曾て憲政の本義を論じて、立憲國民は生命財産及び其他の権利を有し人間として取扱はれるが、專制國の人民は之を有せずして、禽獸の如く取扱はれる。而して法律上に於ける二者の相違は一件其生命財産の保管人則ち代議士を選挙する権利を有し、他は此れを有せざる一點に外ならない、故に政治上に於ける人類と禽獸の相違を煎じ詰れば、國民として選挙権を有すると否とに歸着すると説いた事がある。此の議論が當然、極めて廣義の普通選挙論に通すべき思想に基いて居る事は讀者の容易に首背せられた處であらうと思ふ。然しながら私は決して普通選挙運動の首唱者ではない。私は竊かに今日あるを待ち望んで居た一個の賛成者に過ぎない。故に私は以下少しく、私が如何なる理由の下に普通選挙の國民的運動を迎へ、是に賛成し、微力ながら共に其實現を期すべ

く奔走するに至つたかに就き、所感を述べてみることにしよう。

私が普通選挙に賛成する理由は之を大別して、目的事情と外的形勢の二種とする事が出来る。先づ其目的事情が方面より説明すれば私は第一に四民平等の大義を徹底せしむる爲に普通選挙に賛成する。

願ふに明治維新の大精神が、封建武断の専制政治を排し、四民平等の大義の下に、萬機を公論に決する立憲政治の確立にあつたことは、先帝陛下御即位のに始に方り、畏くも天地の神明に誓ひ玉ひて「廣く會議を起し、萬機公論に決すべし」と宣せられたのに依て明かである。即斬棄御免の惡制度を廢し、武士と町人との階級約差別を施し、兵役國防の義務に於て平等の原則は採用せられ、専制政治維持の爲めに必要な民を愚にする政策を攻め、西洋立憲國の教育を參酌して、全國に大中小學を設け、四民平等に是れに入つて智能を開發する事を許された。然しながら明治二十二年憲法が發布せらるゝ迄は、權利の方面に

於る平等の原則は未だ公に認められなかつた。例へば武士が劔を以て妄りに良民を斬殺する所の斬棄御免は廢止せられたけれども、官吏は尙ほ人民とは全く没交渉に自分勝手な法律規則を制定しその法律規を以てする斬棄御免は依然として繼續せられた。即ち官吏は讓謗件誹毀罪など云ふ法律にかくして、官吏の惡事醜行は爬羅剔抉する正義の志士論客を斬り捨て、又法は既往に遡らすと其の原則を並視して反對黨既往の行爲を責罰せんが爲めに保安條例の如き亂暴なる法律を急造し、國家の爲めに一身の安危を顧みず、政府の條約改正に反對した志士五百名を帝都の外に放逐した事がある。凡そ人を殺すには捷を以てするも、刃をもつてするも、其結果は即ち一である。若し劔を以てする斬棄御免が人民を禽獸視する専制政治ならば、法律規則を以てする斬棄御免も亦人民を禽獸視する専制政治といはねばならぬ。呆然、日本人は維新以後に於ても尙二十有年間禽獸奴隸の生活に虐けられて居たのである。

然しながら既に義務に於て四民平等あり、教育に於て四民平等たる以上、國民の權利に於ても亦當然四民平等の原則が許されねばならぬ。即ち明治二十二年に至り、君民の權利を確定し、人民の生命財産其他の權利を保證したる帝國憲法が發布せられ、權利に於ける四民平等の大義を明かにし、人民は茲に始めて禽獸の境を脱して人間となる事が出来たのである。而も憲法は原則法にして憲法の保證したる權利の内容實績は總て之を法律の規定に譲つてある。故に憲法の保證したる權利の内容を充實し、其實績を改善する任務は舉て國民の選舉したる議員によりて組織せられた議會に托せられて居るわけである。従つて此の議員を選舉する選舉權は、國民が生命財産及其他の權利を確得する第一義の權利として最も大切なものである。然るに此の根本權利を有する者が全國六千萬人中の僅々百四十餘萬人に過ぎない様な現代の状態では、到底、權利に於ける四民平等の實を法律制度の上に徹底せしめる事は可能ない。私は本誌の新年

號に於て「戦後の民主的大勢と日本の政治改革」戰論で、その中で現在日本の法律制度上に幾多の不平等ある事實を指摘し、此の不平等を打破しなければならぬ事を切言して居いたが、之を打破する最上の方法は速かに普通選舉を實施して全國民の希望意志を普ねく議會に反影せしめ、此の議會に依つて現在の不平等なる法律制度を改正する事である。現在の議會はその構成分たる議員の選舉法に於て既に不平等の基礎に立つて居る。是議會が回を重ぬる事既に四十一回なるにも拘らず法律制度の上に不平等は少くも改まつてゐない所以である。

三 萬機公論と普通選舉

私は第二に「萬機公論に決すべし」と云ふ維新の御皇徳を顯揚する意味に於て普通選舉に賛成するものである。

現在の日本の政狀は未だ、國政の萬機を議會の公論に依つて決する域に進ん

ではゐない。議會が屢々その選舉民の意嚮によらず、不平等なる法律制度の掩護の下に頑強に或る特權を維持する少數權力者の願使に甘じて行動したる事實は歴史の明示する處である。但し私は、時代の進運と共に、我國の議會もやがて是等少數權力者の操縱を離れ、獨立してその意志を票決するに至るべきを疑はない、然し假令そう云ふ時代が來ても、この議會が現在の如く全國民の四分の一の少數選舉人により選出せられた議員で組織せられて居れば、その實績は矢張り四十分の一の少數政治で、官僚政治と相去る五十歩百歩のものなることは私が既に度々論じた所である。

願ふに現在の議會の構成法が國民公論の府として不適當なることは、最早何人も認めて眞議なき所であろう。其證據は議院の各政黨が各々案を出して選舉法を改正し、議會をしてより廣凡なる國民公論の府たらしめんとして居るのを見ても明かに看取し得られる。然も私はその擴張の程度を或は二圓、或は三圓

の納稅資格に依つて制限せんとする如き、不徹底、沒道理の改正案には到底首肯する事が出來ない、若し現行選舉法を改正せざれば即ち止む。苟も改正の必要を認めて是を改正する以上、宜しく納稅による資格の制限を全廢すべきである。

云ふまでもなく、現在の選舉法を以て「萬機公論に決すへし」と云ふ御誓文を顯揚すべき議會の構成法として甚だ不滿なりと爲す所以は、直接國稅十圓乃至三圓二圓を納むる階級が議會の構成に強てゐないからではない。却て直接國稅とは縁の遠い、しかも國民の大部分を占めて居る、労働者や、小學校教員や、下級官吏や、會社員及其他の資本者を代表してその不安なる生活を議場に訴へしめる遙か全然開けてゐないからである。端時に制限選舉と云ふ不平等を選舉法がいけないのである。假りに五歩を譲つて納稅の額を以て選舉權の資格を制限せんとする思想を許すとせんが、國民の生活が一般に向上したる今日その

資格を三圓とし二圓とする如きは全く意味をなさない。寧ろ之を十五圓とし二十圓とする方が、従者あるものに従心なりといふ議論に於て根柢がある。然し従者従心論の甚だあてにならぬことは、最近公にせられた多額納税議員選挙に於ける醜事實に照し、又毎度の衆議院選挙に於ける賣藥の事實に徴して明かである。況や三圓、二圓の納税者に従心あり、然らざるものに従心なしとは何人も斷言し得ないであろう。然も此れを外にすれば三圓案、二圓案の強固なる論據は殆どないではないか。實に納税の夥寡の如きは忠良なる國民の資格としては寧ろ第二義以下の軽いものである。第一義に重要なるは道義の念、忠愛の志厚きことである。而もこれ決して納税の額に依て定まるものではない。

四 政治の要諦

私は第三に生活の不安や不平等なる諸制度の壓迫に對し、久しく鬱詰して居

る民心に一道の渠を通し、之を一新する手段として普通選挙に賛成する者である。

凡そ政治の要件は國民をして衣食住に對する不安を感せしめないのである。民心若し此三者に於て不安を感ずれば、その瞬間國に家に健康を失はれざるを得ない。然るに昨年以來多數國民の生活が著しく不安となつた事は争はれない事實である。それも世界的大戦争の影響として歐米諸國が經驗した様に國家の各階級を擧げて平等に生活の痛苦を嘗めたのであれば、御互に我慢もし、自制もするが、我國に在つては一般に資本家は勞せずして法外の利益を貪り、従つて労働者も多少はこれに均霑したが其割合は極めて薄く、殊に定額の薄弱に衣食する刀原頭腦の労働者は、物價騰貴の影響をうけて殆ど生活の安定を失ひたるに拘らず、所謂成金者流は狂氣沙汰の豪華贅澤を恣にし、極端に貧富の不平等を曝露したる結果、人心は未曾有の惡做を現はし、茲に生活の不安と、階級

不平等の反感とは相結んで、終に昨年八月の所謂米騒動の爆發となつたのである。幸に米騒動は間もなく鎮定したが、然しこれを以つて人心不安の原因が去つたと見ては大間違ひで、現在の人心が平調でない事は當局者が屋外の集會を過渡に恐れ、言論が暴動の大元になりはしないかと心配して居るのを見ても分るであらう。今や此の不安が何に原因して爲るかを覺つた國民は、普通選舉を要求して起た。その未だ自覺せざる國民は機會さいあれば再び米騒動の如き盲動に参加するであらう。蓋し大抵の病人は自分の病の原因がどこにある 知らず、管只、患部の痛みを忘れんとして苦しみもなく、暴動に参加する者は大抵社會的缺陷の病人である。

政治家は此の病人に對して應病與藥すべき醫者である。米騒動の脈を診てそれが國民自身には未だ意識してゐない普通選舉要求の動めきである位のことに分らない様では政治家の役目はつとまらない、兎も角疑ひもなく今や日本には

あらゆる方面に於て、不平等なる現在の状態に對する不満不平の氣が充ちて居る。禍の芽は至る處に芽ぐみつゝある。而して私は國民の間に鬱勃たる此の不安の盛氣を放流する唯一の安全瓣は、ただ普通選舉の實現あるのみと確信するものである。

殊に政治家は時勢の變遷推移に對して深く意を用ひねばならぬ。大戦前と大戦後に於ける人心に殆ど隔世の差異あるは勿論、昨年と今年の人心にも亦著しい相違がある。三圓案乃至二圓案が若し昨年の議會に提案せられたならば人心は或は多少の満足を感じたかも知れない。然し今日の人心は最早そんな姑息な擴張では承知しない。是れ世界に吹き渡る風潮の然らしむる所で有つて、何物の力も此の思想的動搖を阻ぐるは出來ないのである。假りに二圓案を實現したりとしても、選舉有権者の數は僅々四百萬人に足らず、況や此の案に依つて選舉權を得る者は選舉權の要求には比較的冷淡な階級であつて、現に熱心に選舉

權を要求しつゝある。手足頭腦の勞働者階級は多く預らない筈であるから、つまり求めざるものに與へて、求むる者に與へずと云ふ錯誤に陥り、到底此の不安なる人心を慰め、以て不平の安全瓣となり、以て治安を全ふする事は出来ない、今や普通選舉はこの急轉直下せる時代に適應する唯一の選舉等を打破する一切の機像は、懸て普通選舉の斷行にある。たゞそれ、是の斷行にある。

五 海外の形勢

翻つて海外の形勢を按ずるに、今や世界の文明國は相率ゐて内治に外交に、罪惡の行はれ易い少數秘密の制度法律を廢し、内治外交の一切に亘りて、多數年間の主義を採用し、凡そ世界の一等國にして普通選舉の制度に據らざるはなく、英國及米國の多數の州に於ては婦人にまで參政權を與へて居る程である。形勢斯の如くにして今や立憲國と專制國との相違は、憲法といふ原則法の有無

によつて判斷せず、その憲法に於て保證せられたる法律制度が如何なる程度にまで人民の權利自由が認めてあるが、換言すればその國が果して多數政事の實質を有するか、否かに依つて決せられる事になつたのである。是れ蓋し、多數公開の政治、即ち端的に萬機を公論に決する政治に於ては、不正や秘密や私事は到底許されないもので、従つて斯の如き政治の行はれる國と國家の内には野心家が秘密の裡に企てた侵略的の戰爭が突然起ると云ふ悞はない。既に此悞れがないから、そう云ふ國同志は御互に打解けて交際し様が此れに反し萬機公論に決する政治が行はれて爲ない國は、その國の野心家が秘密の裡に計畫し大戰爭を、否や應なしに國民におしつけ何時不意に戰を仕掛けられるか分らぬ危険があるから、打解けた交際が出来ないのは勿論、交際の仲間入りも斷らふと云ふ、國際聯盟に加へるか加へないかの資格の分れる點である。

戰爭以前に在つては、武力さへ強ければ一等國として對等の交際ができたの

で、日本が今日世界一等國の伍伴に列したのは全く武力の賜物であつた。然し政治は單に武力だけでは國の優劣は定まらない。更にその國の文化の優劣を吟味する時代となつた。而して各國の文化の優劣を具體的に測量する第一の標準は疑もなく、その國が如何なる程度にまで政治上多數公開の主義を採用して實現して居るかといふ事でなければならぬ。然るに此の標準を以て日本の政治的文化を測量すれば、現状のまゝでは到底合格する資格はない。選舉資格を直接國稅二圓の所まで擴げても未だ前途遼遠である。只普通選舉を斷行すれば鬼も角も其の標準には達するであらう。

頑迷者流は動々もすれば世界の趨勢に順應せんが爲めに國內の政治を收めんとする議論を目して、國家の體面、格式を無視したる西洋翻譯論の如く誤解し、彼れの忌み嫌ふ議論が極めて合理的にして、彼の理性を首肯せしむればせしむる程、感情的に是に反抗し、世界の事は世界の事、日本の事は日本の事、世界

の大勢を以て直ちに日本の政治に提するは不見識極ると叫ぶ癖がある。議論としては甚だ壯快であるが、事實に於て日本は、今や世界より孤立する事は甚だ危険である。但し現代世界の趨勢たる多數公開の政治の原則が日本の國體と相容れないものであれば、いかなる危険を冒しても、是れに逆行せねばならぬが、此の原則が國體と相反せざる所以は、既に屢々述べたる如く「萬機公論に決すべし」と云ふ、先帝陛下の御皇旗に依つて炳かである。

六 普通選舉は終に避く可からず

去年貴族院に於て普通選舉に反對したる議論の中に、普通選舉を危険なりとして退けたものがあつた。而し流石に今はさういふ議論を以て正面より普通選舉に反對するものはない様である。假令感情的に之を危険視するものでも、彼れの理性は結局さうなる事を當然と認むるに想違ない。普通選舉を批評するも

の最も慎むべき點は、先づ、濫りに多數國民を危険視する自己の危険思想を去ることである。又多數の民衆は無智なりと云ふ立場から普通選舉に反對するものが少しはあるかも知れないが、全く根據のない辯論である。今日の多數國民は新聞と事實とに教育せられて、少くも憲法發布發時の選舉民よりは立憲政治に對する智識と理解とを持つて居る。若し多數國民が果して無智にして危険なりとすれば、之に兵役の義務を除し、國防の大任に當らしむる理由を解するに苦しむではないか。

勿論、私と雖も憲法に對する國民の理解を乃至智識が現在の程度で十分であるとは斷言しない。否私はその點に於ては寧ろ甚だ不満足を感じる一人であるが。是れは主として教へざるの罪である、之を教ふる事その宜しきを得ず、猶も布哇著しくは米國に在る日本人が選舉權を以て生命に次く貴重物と感ずる如くなるに相違ない。過渡期の弊害を恐れてゐては如何なる改革も行ふことは出

來ぬ。既に普通選舉の實施を急要とする内外の事情斯くの如く、その反對論に一も根據なき事亦斯の如しとすれば、此の問題についての議論は最早終結したのである。残る所は、此の問題を今年是れを實現するか、明年必ず其實現を期するかに在る。私は衷心今期議會に於て其實現する事を希望するが、諸種の事情より見てその望みのみとすれば、今年は主力を以て不徹底なる改正案の成立を防げ、明年を期して必ずこれを實現せしむる様御互に努力したるものである。實に明年に至れば如何なる近視者流と雖も、世界の氣勢を知り、普通選舉の終に避くべからざる所を悟るであらう。

帝國の使命と國民の覺悟

一 熟考深慮を遂ぐ可き時

「何事ぞ花見る人の長刀」で、昔から花見の場所に拔身のだんびらは禁物とせられて居る、野暮で強かりでその辯實力のない酔ひどれ武士か、こけ威かしに抜いた刀のやり場に困ると云ふ、場所錯誤の喜悲劇は、今や劇場以外では決して見られない珍圖であるが、私は若し日本國民が、這個未曾有の大戦争の影響をうけて當然大激案を起すであろう處の戦後の世界的思潮を深く洞察する明戦なく、漫然今日の如き弱肉強食主義の思想に基く諸般の施設を謳歌し多認するならば、恐らく戦後世界の新舞臺に於て、この酔ひどれ武士と同様な時代錯誤の喜悲劇を演じ、國家の運命を列國の指彈と嘲笑の渦中に投ずる様な破目に陥

りはしないであらうかと云ふ事を、日夜深く憂慮して居る。

私をして忌憚なくいはしむれば、今の日本にとつて一番大切で且つ最も急を要する問題は、軍艦を造られることでも、師團を増す事でも、乃至は西比利亞へ出兵するほどのない、實にこの戦後の新形勢が如何に變化するであらうかと云ふ事を虚心坦懐に熟慮し達視して、できる事なら日本が擱んでその新形勢と歩調を揃へて行進ができる様に、國家の備へを立て直す事である。建艦も増師も出兵も、此の問題が確定した上でやらないと單に無益徒勞に歸するのみならず、却つて甚だ有害な結果を將來することになる恐れがある。

曠々者流は或は言はん、戦後の世界の如きは神以外に知る者なし、此の戦争の終局さへ豫知し得ざる人間の到底窺ひ得る問題にあらず、假りにドンキホーテの如き大冒険家ありて、此の問題の解決に任じたりとするも、彼の結論は所謂理髮師の金盥を以て名譽あるマムブリノの兜と俗信せし痴疾の妄様

に類せんのみと。夫れ然り豈に、夫れ然らんや、苟くも自ら國家の重きに任じ、國運指導の大責任を擔ふほどの者は、將來に來るべき形勢を直覺正感するだけの修養と努力がなければならぬ、曠々者流の音の如きは未だ一度も自らステータマンの重責を體驗した事のない愚論に過ぎぬ。

私はもとより不敏、未だこの問題に對して戦後の新形勢は必ず斯くあるべしと斷定する無迷の心境には達して居らないが、だけそれだけ日夜仲々これを憂へて聊が究むる所あり、今や天下の有識者に向つて所感を披瀝し、希くは各位に於て己に業に熟考深慮を遂げられた所を教へられたいと思ふ。

二 平和か戦争か

這次大戦争の影響をうけて戦後世界の大勢が何の變化するであらうかといふ問題は、現に種々なる人々によつて種々なる解釋が下されて居るが、これを大

別して二種とする事が出来る、即その一は、その戦争の後には益々弱肉強食主義の思想が高調せられて、軍國主義、武力主義、戦争讚美主義が世界の思潮を風靡するに相違ないと云ふのであつて。獨逸心醉黨が多くこの説を支持して居る。その二は、この戦争の後には民族自由主義の理想が實現せられて、民本主義、文化主義、平和強制主義が世界思潮の大家となるに相違ないといふのである。即ち一は國家生活の意義を永遠の地獄の道に發見せんとし、他は人類生活の幸福を永遠の極樂の途に求めんとするのである。

而して日本の閣族官僚の結は多く前説に歸依し、歐米の大政治家の大抵後説を提唱力説しつゝある、しかも私は此の兩者の何れをも首肯する事ができない。そして私はその私の一家言を世に問ふに先ち、なせ私がこの兩者の何れにも與へないかといふ理由を明かにするのが當然の順序であると考へる故に先づそれから述べていかう。

三 軍國主義者の盲斷

この戦争の後、もつと適切にいへばこの戦争の影響として、この戦争の直後に、より一層猛烈な軍國主義的國際關係が出現すべしとするは、軍閥者流の考へ方は歴史と人間の或情を無視した獨斷ではあるまいか。

歴史は戦争の直後には必ず或期間の平和が来る事を辨證する、ナポレオン戦争以後歐洲に五十年の平和あり、普佛戦争以後普佛間に亦五十年の平和あり、日清役後日本は十年の隠思蓄積を要した、日露戦後露西亞は十ヶ年靜養を要した、總て戦争は國家の人と物質を夥しく浪費するが故に、一度戦争の當事者となつた國はその疲勞より回復するまでは、軍國者流がいかに咽から手の出るほど戦争に垂涎しても、この國家的大賭博をうつ事は出来ない。現に今度の大戦争を爆發せしめた導火線ともいふべきボスニア、ヘルツェゴビナが、一九〇八

年獨逸の尻押しで奥匈國に併合せられた際、露西亞が塞耳比を見殺にしたのは全く日露戦争の劍疾未だ生新らしくして到底干戈を執つて塞耳比を救ふ力が備はらなかつた爲めである。

即ち人間生活に於て疲勞の次には睡眠が必要なのと同様、國際生活に於ても戦争の次には平和が必要なのである、而して大疲勞の後には大睡眠をとることが生理的必然なるが如く、大戦争の後には稍々永き平和を持続する事が國家の生理上必然なものであるまいか。

四 獨逸の例を見よ

勿論、或る種の戦争は嘗にその戦争の終局後に平和的空氣を持ち來さないのみならず、益々向戦争的思想を助成して、次のより大なる戦争を誘發する場合もある、彼の數次に及んだ巴爾幹戦争は即ちその好適例といへる。又今の獨逸

人が彼の如き軍國主義に耽溺した動機は一八〇六年、大那翁の一擧に忽ち伯林を占領せられ、チルシット條約の結果、ライン、エルベ兩河間の地を割かれ、一億三千萬フランの償金をとられ、四萬以上の常備軍を養ふ事を禁せられ、殆んど全く獨立國の面目を踏み潰されて了つた。その遺根が深く骨髓に徹して、普國民は茲に復讐の悪鬼維利と化し、ひたすら寢刃を研ぐ事となつた、爾來、臥薪嘗膽六十年の効は先づ一八六六の普墺戦争に現はれて、宣戦より講和まで僅々十三週間、實戦僅かに六週を以てドイツ小邦の盟主にして一等國たる墺太利を撃破した、この一戦で大に自信づいた普魯西は更に一八七〇年佛蘭西と難を構へ忽にしてセタンを抜き、忽ちにして、奈翁三世を虜となし（此間僅に七週）遂に佛蘭西よりア、ロ二州と五十億フランの償金を奪つて完全に復讐の志を成したのみならず、此の二戦勝によつて普魯西は一躍獨逸統一の大業を成就し自らその盟主たるを得た。而して斯る安價な成功は近世史上殆ど他にその類

例を見ない、實に獨逸は軍國主義の大成金である。これと較べては大に劣るが、我が國が日清戦争の結果東洋の強と認められ、日露戦争の結果一躍世界の一等國となつたのなども亦小さな成金と云へる。而して是等の戦争が、その戦争の直後に於て愈々益々戦勝國民を軍國主義の謳歌者たらしめたのは争ふべからざる事實である。

軍國主義の斯る安價な成功は、常に當該戦勝國民を馳つて益々軍國主義の奉仕者たらしむるのみならず、或一國民の軍國主義奉仕は、これと利害關係を有する他の國民をし、彼れとの對抗上、不知不知、軍國主義的傾向を帯びる様にならしめるものである、呆然、這の大戦争は過去に於ける普魯西軍國主義の陣ゆいばかり華やかにして且安價な成功が、人類を誘惑した結果とも視られる。

五 寡婦孤兒に満されたる歐洲

然しながら、今度の戦争に於て、各交戦國民は己に餘りに多くの犠牲を拂ひ過ぎて、彼等の精神と肉體はたとひ勝利の魔術を以つてしても到底胡摩にし切れないほどの大悲哀々大質績を擔ひ且つ喘ぎ且つ苦しみつゝある。そこで私は今や此の戦争の大慘禍に對して深き憂愁と悔恨に沈みつゝある人類の嘔きに耳を傾けなければならぬ。

實をいふと日本の如く名義だけの交戦國で、實質的には戦争の慘禍どころか戦争の祝福をうけて思ひかけない成金國となつた國民には、現に歐洲人が痛切に味はひつゝある、戦争恐怖、戦争憎意の感情を適當に理解する事は出来ない、而し試みに彼等が過去四年の戦争に於て損消したる人命と財産のいかに驚くべき巨額に達したるやを知れば、この戦争の慘禍に對し歐洲人がいかなる思想感情を懷ひて、煩悶しつゝあるかの一斑を推察する事が出来るであらう。

歐洲の各交戦國がこの呪はれた戦神の祭壇に捧げた犠牲は、今日己に業に人

に於ては三千萬人を超へ、財に於ては三千億圓を過ぎて居る、それにも拘らず戦神はまだ此の先きどれ程の犠牲を要求するのか分らない、苟くも彼等が禽獸本名でない限りは、此の大犠牲に對しては戦慄し恐怖しない譯けがない。實に歐洲の各交戦國は既にその壯丁の三分の一乃至半數以上を死、傷、病、俘虜となして居るのである。即ち殆ど歐洲の各交戦國では二戸毎に一人位の割合で或は夫を失ひ、或は父を失ひ、さては兄弟朋友を失つて居る 勘定である。呆然、寡婦孤兒全歐に滿つと云ふは、決して單なる形容詞ではないのである、假りに一戸を五人として計算する時は三千萬人の死、傷、病、俘虜の遺族、家族は一億五千萬人となる、而して少くともこれ丈けの人は戦争の爲めその骨肉を失つて涙の深淵に沈んで居る道理である、これ丈の人の涙、これ丈の人の悲嘆が、人類の思想感情に何等の影響を及ばさないで濟まうとはどうしても想像されない。況や新戚知友も亦た血族親友の戦死し傷き病み俘虜となれるに對して涙を

催すは人間自然の情であるから、今や歐洲人一人残らずが戦争の慘禍に心を傷め、骨肉知人の災危に涙を流して居ること、想はれるに於ておやである。

しかも慘禍はこれのみではない、現に歐洲の交戦國は何れも、戦後特別の法を發見するにあらざれば到底償還の道がない程巨額の戦費を豫擔して居る、即ち歐洲の一等國は現在既に三百億乃至六百億の公債を起して居るが、假りに五百億の公債に對し年五分の利息を拂ふとすれば、利息だけで二十五億を要する、これ各國戦前の全歳入を擧て、尙支辨し能はざる所。況んや戦後に於ては各國共に疲弊してその歳入は到底戦前のそれに及ばないであるふと推察すべき理由があるから、單に公債の利拂ひといふ一點から見ても何か非常特別の手段を發見せざる限り、各國其破産状態に陥らざるを得ないのである。然しいくら善智識でも、無い袖は振られないから、結局、元利の何れかを打ち切るか又は元利共に打切ると云ふ様な非常手段に出で、露西亞の過激派がやつた様なる

を、もつと巧みに技工を凝らしてやるようになるかも知れない。而してそれが爲めに現状のまゝで押し進めば當然戦後に於て益々その勢を高めるであらう處の貧富の階級争闘が却つて或程度まで緩和せられる好結果を齎らすことになるかも知れない、邁莫、兎も角歐洲の交戦國は今何れも夥しい戦費の負擔によつて破産的運命に呪はれつゝあるのは争はれない事實である。

六 戦争の恐怖

さて然らば戦争によつて現に斯の如き人的慘害と、財的損失を實地に經驗しつゝある歐洲人の思想感情は、如何に變化するであらうか。我が閥族官僚者流の施設計畫する所を見ると、彼等は斯る慘害にも拘らず世界の氣勢は依然戦前と大差なく、寧ろ戦後は益々軍國主義的傾向が強くなつて、列國は此の戦争休止と共に直ちに次の戦争準備に營々するであらうと考へて居るらしい、否々、

それほどの考へすらなく只漫然、從來のしきたりを踏襲し現状に満足して居るらしく思はれる。

然しながら、普通の人情からいへば、斯る惨害を蒙つた後には、何とかして今後は再びこの恐ろしい経験を繰り反したくない、こんな無益な勝負には避けられるだけ避けたいと云ふ思想感情が湧いて来る筈である、例へばいかに酒好きの人でも、大酒して大患を得た場合、少くとも當分の間は禁酒若しくは節酒の念を起す様なもので、いかほど戦争の誘惑に酔ひしれた國民でも、眼のあたりこの惨憺たる我禍と差し向ひに座る一刹那、必ずや勝利の悲哀を痛感して悔悟の念を起すに相違ない、況んや何等決定的勝利の醉陶なく、只犠牲に對する悔恨の情のみ鋭く目覺めて居現代歐洲人心が、この戦争を起點として戦争を憎み、戦争を恐れる様になるであらうと推論する事は、これとは公然反對に戦後世界は益々軍國主義的傾向を帯ぶるであらうとする悪魔的想像よりは、少くとも

も人間的であり、確實性が多い様に思はれる。

否、適切にいへばこれは決して單なる推察空想にあらずして、この戦争恐怖戦争呪咀の思想は、世界人類の感情の上に日一日として其の飲域を擴張しつつあるは争はれない事實である。私が今若「歐洲列國は戦争を恐怖し戦争を呪咀するが故に戦争を繼續して居る」といはば、人は其の音の奇なるを怪しむであらうが事實は全くこの音の如くである。即ち彼等は今回の戦争に依つて、未だ曾つて人類が経験した事のない戦争の惨禍を實驗した、若し將來再び戦争が起つたならば或は人類絶滅の大危機を現出するやも知れない、故にどうかして將來再び戦争を起らない様にした。然るに今犠牲の大なるを恐れ途中で此の戦争を止める様なことをすれば、止めた翌日より直ちに次ぎの戦に對する準備を整へ、やがて今より大なる戦争に於て今よりも大なる犠牲を拂はなければならぬ。故に彼等の言葉をかりて云へば永久の平和を得る爲めに戦を續けて居るのであ

る。
果然、その始めは時代の好戰的思想によつて激成せられ支持せられた現戰役は、今や戰爭を呪咀し戰爭を壓惡する思想に依つて熱心に繼續せられて居るのである。日本の軍閥者流は爭戰の當初と今日とでは交戰國民の思想感情にこの大變化のある事に氣付かないのではあるまいか。各國が殆ど死者狂ひで戰爭に熱狂してゐる事それ自身が、來るべき平和時代の先驅なることを悟り得ないのではあるまいか。

私は、以上の理由によつて戰後世界の大勢は更に一層猛烈なる軍國主義の色調を呈するであろうとする閥族官僚の見解を首肯する事が出来ない、従つて、そういふ見解の下になされる軍事、外交、財政、經濟、産業 百般の施設計畫に對して、多大の不安を感せずには居られない。

七 軍國主義勝利の場合

説をなすものあり、戰爭平和時代來るが、より一層緊張した軍國主義の時代が來るかといふ問題は、懸つて獨逸の勝敗如何になる。獨逸勝てば世界の大勢は軍國主義に傾き獨逸が敗ければ溫和主義に傾くと。一應最もらしい説であるが、私は、之れに對して、假令獨逸が勝つても、戰後世界の大勢は溫和主義になるのではあるまいかといふ疑ひを持つてゐる。

この戰爭で獨逸が勝てば世界の大勢は益々軍國主義になるであらうといふ説は、可成確實性らしいものを持つてゐる。是れを歴史に徴するも、普墺及び普佛戰爭に於ける普國軍國主義の目覺ましい戰爭が、獨逸民族を誘惑して益々軍國主義に耽溺するに至らしめ、ひいて所謂武裝的平和なる自殺的傾向を助長し各國皆軍備を擴張充實して遂に這回の大惡魔戰を勃發せしめたことは前述した

通りであるが、普墺、普佛兩役に於ける勝利と、今回の勝利（假りに獨逸が決定的勝利者たり得るものとして）とでは、その勝利を贖つた代價に著しい差異のあることを知らねばならない。一圓で買つてこそ安いといつて喜ぶ價值あるものを、千圓で買つては、其の喜びの度は減せざるを得ない、場合に依つてはそれ程の價值のないものに餘り多くを拂ひ過ぎた、買ひ被つたといふ悔恨の情さへ起つて来る。併し幸にして獨逸は敗れた。

戦勝の喜悅は求して無條件ではない。絶對的ではない、それに拂つた代價とそれから得た利得の差に正比例すべきである。

普墺戦争に在つては僅かに七週間で強敵墺國を屈服せしめた。従て其の犠牲を知るべきのみであり。普佛戦争に於ては之も七週間を出でずして奈翁三世を虜となし、半年経たぬ中に普魯西王はヴェルサイユ宮殿で日耳曼皇帝の位に即位した、而して完全なる勝利の結果、莫大な償金と土地とを得た。勿論その得た

所はその拂つた代價を償て大に餘りがあつた。そこで獨逸國民は勿論、世界の人類は「戦争ほど安く得たものはない」といふ思想の洗禮をうけたのであるが、今度はそうはいかない。

獨逸の軍國主義者が、此の戦争を計畫した最初のプログラムが矢張普墺、普佛の前例に習つて、突差の間に決定的勝利を得、即ち安價な勝利を得て、再び國民の喝采を博さうといふに在つたことは、カイゼルが出陣に臨んで、街路樹を指し群衆に向つて「朕は樹葉の凋落に先つて凱旋し、再び汝等を見るべし」と豪語し、英國民の感情を顧慮する遑なく敢然白耳義の中立を侵したのでも分る、然るに其事は志と違ひ、カイゼルが指し示したウンテル・デン・クンデンの樹葉は四度凋んで四度芽ぐんだが、決定的勝利を得ることは出来なかつた。嘗に勝利の時日が遷延したばかりでなく、勝利の代價も亦豫定の数十倍を費して而かも目的の勝利は得られないといふ有様であるから、獨逸國民の失望落膽は蓋し

思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

其筋の調査に依れば、獨逸は召集總員一千二百萬人の昨年十月末までに五百萬人以上の死傷俘虜を出し約四割二分を損消して居り、奥國は召集總員九百三十萬人の中四百八十四萬人即約五割二分を損失して居る、のみならず兩國共戦前の歳入全部を以てしても、尙その利息にさへ足らないほどの借金を負ふて居る、かゝる大負擔に耐へて幸に勝つたところで領土慾は或は満し得たも、償金のとれる見込みはない。従つて獨逸國民も今や漸く對奧對佛兩役の成金的迷夢より醒めて『戦争ほど高くて損なものはない』といふ感情を起しつゝあるであらうと想像せらる。

蓋し勝利の犠牲が、百戸につき一人の壯丁位ですめば、その一人を出した家族の悲嘆は、九十九戸の歡聲に打ち消され若しくは名譽的感情に依つて慰められるが、それが五十戸に一人となり、二十戸に一人となり、常に二十三戸毎に一人の犠牲を出すやうになれば、いかに勝利の魔術を以てしても、國に充滿する寡婦孤兒を激ましてより以上の好戰的感情を唆ることの出来ないのは勿論、勝利の喜悅は却つて是等の不幸なる人々の嘆聲の中に埋没せられる。

日本人は全獨逸に滿てる此の不幸な人々の聲を聞かないで只だ戦線より來る連戦連勝の電報のみを見るから動もすれば、獨逸國民は戦勝の公報に鼓舞せられ、國を擧げて勇躍奮戦してゐるやうに想像するが、私は必ずしもさうであるまいと考へる。何となれば獨逸國民が若し心からその戦勝を祝福し讚美して居るものとすれば、獨逸の武斷者流は、益々國民の信頼を得て横行活歩すべきであるのに、事實は全くこれに反して、開戦以來彼等は頻りに國民に對して讓歩してゐるではないか。私はこれを數次の政變に見、これを數次の詔勅に見る。

一體戦時に於いて舉國一致すといふは、國民が政府に讓歩するのが通例である。殊に連戦連勝の場合はさうあるべきである。現に日清日露の兩役に於て在

朝武斷派は一も讓歩したものは無い、盡く在野黨の讓歩に依つて舉國一致が保たれたのである。然るに獨逸の現状は全く之れと反對は皇帝——政府が在野黨に讓歩して僅かに舉國一致が破れずに居るといふ實狀に在る。これ果して戰勝に醉へる國民と政府の關係であらうが、私は獨逸國民も亦決して戰勝に醉つては居ないと考る。(獨逸政府が國民に向つてなしたる種々なる讓歩の中、尤も顯著なるものは、一九一七年四月七日の詔勅によつて、選舉法の改正及び内閣制度の民主化——帝國宰相をして帝國議會に對して責任を負はしむる事——を約し、更に同年七月十一日の詔勅によつて普通選舉法を平等選舉に改むることを確約したること等を數ふべきであらう)。

そこで私は是等の事情を彼是綜合して、たとひ獨逸が勝つても、この戰爭の直後に、益々軍國主義的傾向がその濃度を増加しやうとは思はれない。獨逸の戰勝すら既に然り、況んや無勝負の交綏狀態の平和をや、更に況んや永久の平和を求めて戦ひつゝある聯合軍の勝利をや。

八 永遠の平和

これだけいへば私がこの戰爭の後には大體平和の時代が來ると考へてゐるものなることは讀者も略々想像せられることと思ふが、さてそんなら、戦後に來る平和時代は何時まで續くか、歐米の民主的政治家は頗りに「永遠の平和」と叫び、心から文字通りにその理想を實現しやうと望んで居るやうだが、私は此說にも首肯し難い。戦後平和の時代が來ることは略疑ふの餘地がないけれども、その平和が文字通り永遠の平和にならうとは思はれない。先づ短かければ三五十年いかに永く續いても百年を超えるやうなことはあるまい。蓋し政治家は、^んこの三五十年乃至百年の平和を指して永遠の平和といふのである。

由來人間は惡魔の子である。私は初め人間は神の子だ人間の性は善なるもの

だといふ人生觀を抱いて居たが、其後實驗した種々の經驗に徴して今では人間は悪魔の子だ、人間の性は悪なるものだといふ考へになつた。實際人類の天質は頗る不公平で其慾に富み、自我心が強くて、弱い間は正義だとか人道だとかいつて尤もらしい事をいふが少し強くなると直ぐ他人を凌駕し他人を壓迫しようといふやうな能度を露はすものである。この私利、私慾、不公平な思想が戦争の根本原因となるのであるから、人類からこの不公平な思想が除かれない限りは永遠の平和といふ事は到底實現せられるものではない。勿論今回の大戦争に懲り果てた文明人は、再びかゝる戦亂を起さない様に、人類の思想感情の根柢に向つて、政治に教育に非常な努力をなすに相違ない、而して其の結果案外永い平和が得られるかも知れないが、所詮人間は悪魔の子孫である、到底公平な本性を變えることはできない。

戦争の創痍癒え、戦争に對する恐怖の念が薄らぐに共に、再び好戰的本性を發揮して、今よりも更に一層凄惨な戦を戦ふ爲めに、恐らしい殺人器機の發明に向つてその天才を働かせるやうになるであらう。

九 急務中の急務

私は此戦争の直後に、より一層緊張した武裝的平和の時代（この語はそれ自身既に自殺的意味を有して居る。苟くも武裝をすれば戦争が来るのは當然で、武裝的平和が一場の空夢に過ぎないことは現戦役が最も雄辨にこれを證據立てゝ居る）が来るであらうといふ日本の軍國主義者にも感服が出来ないし、此戦争が世界最後の戦争で、これより後は永遠の平和が来るであらうといふ永遠の平和主義にも賛成が出来ない。即ち私の立場は、戦後世界の大勢は必ず平和主義に傾くであらうが其の平和は決して永遠の平和にあらずして短かければ三五十年、永くも百年を超えない程度の平和時代であらうといふ點にある。

然しながら、假令一時的にもせよ、世界の大勢が平和に傾き、各國競つて平和的施設と平和實現の組織とに向つて進む時代が來るとすれば、この大勢に對して日本は如何にすべきか。これ實に刻下焦眉の大問題でなければならぬ。

時代の大勢は恰も怒濤の澎湃たるが如きもので、何物と雖もこれを阻止する事は出來ない。戦前の軍國主義的大勢は、萬事を舉げて盡く戦争の犠牲たらしめた。戦後の平和的大勢は或は萬事を舉げて盡く平和の祭壇に捧げるやうになるかも知れない。彼の歐米民主々義者によつて唱道せられつゝある永久平和實現の諸理想（軍備制限、國際裁判、國際軍備、祕密外交排斥、民族自決、國際聯盟等）は日本に於て未だ眞面目に研究せられず、一場の空想として退けられて居るやうであるが、たとひそれは戦前に於いて一場の空想に過ぎなかつたにせよ、戦後大勢の赴く所或は是等の空想が各國民の熱烈なる平和の要求により見事に實現せられないものでもない。少くとも軍備縮小問題の如きは將來の問題

ではなく、現實の問題、既定の事實としてはつきり認識して置かねばならない。即ち歐洲列國は敵味方を通じ死傷、俘虜として、既に凡そ召集し得べき壯丁全數の半を失ひ、又財政的には破産状態に陥つて居る、苟くも全國皆兵制度の國家に於ける斯る状態は直ちに軍備の財料たる壯丁と財力の半減乃至大消滅を意味し壯丁と財力の大減滅は直に軍備の大縮小を意味する。

斯くて世界の大勢が軍備縮小平和熱望に向つて進みつゝある時に當り、日本が無意識裡にこの大勢に反抗し軍備を擴張し、戦争を希望するが如き施設を行はんか、恰かも花見の席に抜刀をふり廻す痴漢と同様、徒らに世界の指彈と嘲笑を蒙り、遂には國運の隆盛を傷ける如き不幸な結果になるかも知れない。若し日本の武斷主義者が軍備擴張、戦争讚美的な施設の世界の大勢に逆行するものなることを意識し、敢てこれを押し切るつもりでやつてゐるのなら、是非善悪は別として確かに一つの行き方であるに相違ない、然しながらかゝる大膽な

行爲は、空威張の感情に依らず冷静な國力の打算の上に立たなければならぬが、私は日本に獨力で世界の平和的大勢に抗爭し得るやうな大國力がどこに隠してあるか、未だ不幸にして知るを得ない。況んや、苟くも此の打算なくして、漫然世界の大大勢に逆行するが如きことあらんか、國家の前途實に寒心に堪へないものがあらう。

例を國內の變局にとるは或は當らないかも知れないが、徳川幕府の末期の季に當り行はれた長州征伐は、正に日本の新舊勢力を劃立すべき分水嶺であつた、然るに舊藩の多くは、此時代の大勢が潜運默移しつゝ、あることを覺らず、長州征伐以後に於ても依然として徳川の勢力が天下を支配すべしと考へ、所以佐幕黨となつた。然るに薩長の二藩はよくこの大勢を覺り自ら率先して大勢指導の任に當り、土肥の二藩又よくこの大勢に順應して王政復古の爲めに奔走した。これ薩長土肥が明治年間の政權を握り、長薩の如き大正の今日に至るまで尙其

餘勢に生きて居る所以である。之れに反し大勢を見誤つて佐幕黨となつた東北地方の雄藩大名は今日に至るまで尙其悲運を挽回することができない、殊に最後まで此大勢に逆行して遂に非慘な最後を遂げた會津藩の末路の如きは、我が閥族者流にとつて好個の活教訓ではあるまいか。

吁、世界の大大勢は茲に一大轉機に際して居る。この大勢を指導するものは榮へ、此の大大勢に順應するものは生存し、この大勢に逆行するものは滅亡する、然らば即ち日本の擇ぶべき道は指導か、順應か、將又逆行か。今や國家は興亡盛衰の岐路に立つて居る、誰か此の大大勢を達觀して國家の興隆を司るものぞ。曾ては維新の大大勢を指導したる薩長も末裔既に耄して又昔日の明を期待するこゝとが出来ないしかも國民は手を袖にして落花を見る。即ち憂ふる所を述べて識者の叱正を待つ所以。

(終り)

大正八年五月一日印刷
大正八年五月五日發行

世界の改造と日本の將來

正價金壹圓貳拾錢

不許複製

著者	尾崎行雄
編者	野中正
發行者	玉井清五郎
印刷者	三澤善哉
印刷所	兵林館印刷所

東京市麴町區飯田町五丁目六
東京市麴町區飯田町二丁目三三
東京市麴町區飯田町二丁目三三

發行所

東京市麴町區飯田町五ノ六

電話番町三三〇六番
振替東京壹參四九參番

玉井清文堂出版部

察計補

卷之三

三〇六

王

不

三

三

大正八年五月一日

玉



終